

女子大國文 第百五十三号 平成二十五年九月三十日

二〇一三年度公開講座

新撰朗詠集の魅力

柳 澤 良 一

はじめに

本日は、京都女子大学国文学会の公開講座にお招きいただき、ありがとうございます。文学部長の新聞一美教授には、いつもお教えいただくことばかりで恐縮しておりますが、ただ今はまた、過分なご紹介にあずかり、心から感謝申し上げます。

私は一昨年、『新撰朗詠集全注釈』全四冊（二〇一一年二月・四月・五月・七月刊、総二五八一頁、揃定価七九〇六五円、新典社）という大部な本と、慶應義塾大学文学部の佐藤道生教授との共著で、『和漢朗詠集／新撰朗詠集』（和歌文学大系47、二〇一一年七月刊、六五六頁、一四五〇〇円、明治書院。このうちの新撰朗詠集を担当）という二種類の著書を上梓しました。いろいろな事情があつて、研究を始めてから三十年もかかってしまいました。今まで誰も本格的に手を付けなかった作品についての研究で、知られる限りの伝本を調査して歩く訪書の旅をはじめとして、

その作業は、もちろん苦しいことも多かったですが、終わってみると楽しい思い出ばかりです。

今日は、そうした研究の中から、私自身が興味を引かれ、ぜひ皆さんにも味わい、知っていただきたいと思う作品の数々、すなわち『新撰朗詠集』の詩歌の魅力について、お話ししたいと思います。

そもそも漢詩と和歌とは本来、相対立するものです。漢詩は、『詩経』『毛詩』大序に「詩は志なり」とあり、漢詩とは志を述べるものです。一方、歌とは、訴えるものです。自分の感情、すなわち「情」を、口や体を通して訴える、それが歌というものです。したがって、歌は、情念的で本能的で、肉体的なものです。たとえば「あの人が恋しい」、これは情です。漢詩では、古い民謡（古楽府）以外は普通、恋情をうたいません。なぜなら、漢詩は志を言うものだからです。社会正義に対する自分の意見を述べるのです。ところが、日本の漢詩は、平安中期になると、急速に和歌に近づいてきます。そこに詩歌の交響、コレスボンデンスの面白さが生まれます。これまで中国の漢詩の模倣だとして一段低く見られていた日本の漢詩を、そして漢詩と相対立するものと考えられがちであった和歌を一つの題目の下に併置して、中国漢詩と同じレベルのものとして認識させたり、そこから醸し出される絶妙なハーモニーや味わい深さなどによって新たに豊かな香りをもつ作品世界を創造したり、また自然と人事の部立を加えたり、さらにはまた、新たに配列方法や、詩歌の採録を典拠の項目や詩題に縛られないなどの工夫を凝らしたりと、藤原公任の『和漢朗詠集』で示された方法を、その約百年後、今から八百七、八十年前、平安後期の歌人で、広く和漢の才学に富む藤原基俊の『新撰朗詠集』も踏襲し、それぞれの部立や題目の中の詩歌のコレスボンデンスの面白さが出るように工夫しています。今回はこの点について、これ以上触れる時間はありませんが、こうした味わい方もお勧めの鑑賞方法の一つだと思います。

さて、これから『新撰朗詠集』から、幾つかの作品をあげてみます。『新撰朗詠集』の魅力の一端が皆さんに伝われ

ば幸いです。

一

春霞秋月 潤 艶流於言泉 花色鳥声 鮮 浮藻於詞露 新撰和歌集序 紀貫之

（『新撰朗詠集』巻下・文詞・四三五）

春の霞はる ぐすみあきの月つき 艶流えんりゅうを言泉げんせんに潤うるほし

花の色はな いろとり鳥とりの声こゑ 浮藻ふさうを詞露しろうに鮮あざやかにせり 新撰和歌集の序 紀貫之

四季万物の代表的な景趣をあげて、それらが言葉のあやをもつて表現されることにより「文学」となることを述べています。

春の霞、秋の月など四季の風物を美しい文章の流れの中に描き、それをさらに言葉という泉にひたして潤いをつける。また、花の色、鳥の声など万物の景趣を華やかな修辭で表現し、それをさらに言葉という露でいっそう鮮やかにする。

紀貫之の私撰集『新撰和歌集』四巻の真名序にある句で、文学表現にとつてあやがいかに大切であるかということ言っています（四巻の構成にも四季が意識されています）。現代に生きる私たちは、文学もまた、コミュニケーションの道具の一つと考え、相手に伝える内容の方に重きが置かれがちで、あまり貫之が言うようなあやについては意識することはありませんが、あやが重要な文学の要素であるという指摘は、文学についての大事な、ともすれば私たちが忘れがちな視点だと思います。「春霞秋月」は、春の霞、秋の月など四季を代表する景物ですが、『万葉集』では秋

にも霞が詠まれるものの、平安時代には、春は霞、秋は霧と季節を分担するようになっていました。月は、四季それぞれに賞美されますが、秋の月はとりわけ、八月十五夜の中秋の名月によって高く評価されました。「花色鳥声」は、同じ貫之の『古今和歌集』仮名序に、

かくてぞ、花をめで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、つゆをかなしぶ心、ことばおほく、さまざまになりにける。

ともあります。また、「艶流」は、あでやかで流麗な言葉のことで、紀淑望の『古今和歌集』真名序にも出てくるので、この時代の大事な語と考えられていたことが分かります。「言泉」と「浮藻」も、『文選』巻十七の陸機「文の賦一首、并に序」(文賦一首、并序)に出てくる言葉で、紀貫之の句の背景には、淑望は同時代ですが、西晋の代表的な文学者陸機(二六一年～三〇三年。字、士衡)の作品があつて、それを念頭に置いてこの句は作られているということになります。つまり、西晋という六朝時代の陸機の賦、及びその文学観が色濃く反映され、この句が作られていることを示しています。

二

このような六朝時代の文学観は、「文詞」部全体に見られるもので、その最初には陸機の「文の賦」そのものが引かれています。

収「百代之闕文」採「千載之遺韻」觀「古今於須臾」撫「四海於一瞬」文賦 陸士衡

〔『新撰朗詠集』巻下・文詞・四三三〕

百代はくたいの闕文くゑつぶんを収めをさ 千載せんさいの遺韻いゆんを採とる

古今ここんを須臾しゆゆに觀み 四海しかいを一瞬いつしゆんに撫なづ 文ぶんの賦ふ 陸士衡

文章を作ろうとする時は、百年もの間見ることもなかった表現を使い、千年もの間誰も使わなかった言いまわしを用いるように心がける。そのようにして作られた作品は、古今を瞬時に見て取ることができるし、また、世界の果てまでを一瞬のうちに捉えることができる。

という句で、文章を作る時の大事な点は、精神を集中して想像力を働かせ斬新な表現を生み出すように努力することで、そのようにして作られた詩や文は、一瞬のうちに古今東西を捉える力もあると説いています。まさに「文学の力」を説いた句と言えましょう。この部立の「文詞」とは、「人間の文化的な営みのより重いものとして文事を扱おうとする『朗詠集』独自の立場がうかがえる。」言葉です（三木雅博『和漢朗詠集とその享受』勉強社、一九九五年（平成七）九月、七六頁）。

三

次の句は、

声こゑ麗曲れいきよく敲うた寒玉かんぎよく 句句妍詞綴うたひあ色絲いろ 白

声こゑの麗曲れいきよくは寒玉かんぎよくを敲うたぐ

句句くくの妍詞けんしは色いろの絲いとを綴つづれり 白

『新撰朗詠集』巻下・文詞・四三四

という句で、詩句の美しさは、聴覚・視覚にも訴えるということを詠んでいて、

声調や言いまわしの美しい句は、いずれも口に詠ずれば美しく冴えた玉をたくように聞こえ、句ごとの美しい言葉は色糸をつづり合わせたように色美しく見える。

という意味になります。詩や賦などの文章は、麗しい（美しい）ことが望ましいとされた、やはり六朝時代の考えを受け継ぐ内容です。

このように、この「文詞」部は、私たちがともすれば忘れがちな、文学におけるあやや想像力、斬新な表現、聴覚・視覚への心地よさの重要性などを改めて指摘していて、記憶にとどめておきたい作品群と言えます。

四

家訓欲^レ聞^レ残日少^一 洛陽風月莫^二遲^一歸^一

饒^一源能州^一 輔昭

『新撰朗詠集』卷下・饒別・五九八

家訓聞^かかむとするに残日^{さんにつ}少^{すくな}し

洛陽^{らくやう}の風月^{ふうぐあつ}に遅^{おそ}く歸^{かへ}ること莫^なかれ

源能州^{げんのうしち}に饒^{はなむけ}す 輔昭

能登守として赴任する源順君よ、君が学んだわたしの家の菅家の学問について聞こうと思うが、わたしも生涯に残された日数はそう多くない。それゆえ、君の任が終わり次第、この都の風月詩文の地に一日でも早く帰って来てほしい。そして家訓を少しでもわたしに教えてほしい。

という内容の句で、天元三年（九八〇）春、源順の能登国守赴任に際して饒別の宴が開かれた時に詠まれた作品です。

おそらく朗詠されたものと思われます。漢詩文に堪能な慶滋保胤・菅原輔昭たちも参加していた事が知られる惜別の宴ですが、この宴席で保胤は、

三百盃さんびやくはいといふとも強あながちに辞じすること莫なかれ、辺土へんどは是これ醉郷すいこうにあらず、

此この一兩句いちりやうくは重かさねて詠えいじつべし、北陸ほくりく豈あに亦また詩しの国くにならむや

(雖三百盃「莫強辞」、辺土不「是醉郷」、此一兩句可「重詠」、北陸豈亦詩国。『和漢朗詠集』巻下・刺史・

六九二)

とも詠んでいます。

当句の作者、菅原輔昭は、文時の子で、文時には門弟が多く、慶滋保胤・藤原有国などが知られていますが、その内容から源順も門弟仲間の一人に数えてもよいと思われます。「風月」は、風と月のような詩文の対象となる自然の風物、詩興を催す自然ということで、漢詩文、また漢詩文を作ることを行います。もともとは、白居易の『白氏文集』に見える言葉ですが、菅家では「風月詩文」の意味でよく使われていたことが知られています。

源順は、和漢両面の才能をもち、文人・歌人・学者として活躍しましたが、役人としては不遇で官位に恵まれませんでした。二十代前半の承平四、五年（九三四～五）頃、醍醐天皇の第四皇女勤子内親王の命によって『倭名類聚抄』を撰進し、『宇津保物語』や『落窪物語』の作者にも擬せられています。『後撰和歌集』の編者にも加わり、『万葉集』の訓釈に「梨壺の五人」の一人として参加しています。その順が晩年、やつとのことで官を得て能登守となり、任地へ赴任するというので、この句が詠まれました。もう普通の役人ならば「致仕」といって、退職する七十歳になつてのことです。順は、永観元年（九八三）、七十三歳で亡くなっているので、二度と京の都の地を踏めなかったのかも知れません。そんなことを思つてこの句を改めて読み直すと、万感胸に迫るものがあります。

五

故郷有^レ母秋風涙^レ 旅館無^レ人暮雨魂^レ 代「^二迂陵島^一」 為憲

『新撰朗詠集』卷下・行旅・六〇六

故郷に母有^レり秋の風の涙^レ

旅館に人無^レし暮雨の魂^レ 迂陵の島人に代はる 為憲

遠くはるばる迂陵島からやって来た人の身になって、心細い旅路の様子を詠んだもので、迂陵島からの旅人を思いやった、濃やかな人情味あふれる作品です。

故郷には母が残っている。こうして秋風に吹かれていると郷里が思い出されて涙がこぼれる。宿舎には人の姿もなく、夕暮れ時に雨が降ってきて、その音を聞いていると魂が浮かれ出てゆきそうだ。

迂陵島は、朝鮮半島東南海上にある鬱陵島のことで、于山国ともいい、六世紀に新羅に征服され、次いで高麗にも従属し、十一世紀初め東女真の侵略で滅びました。平安期には「うるま」とも称されていました。藤原行成の『権記』長保六年（寛弘元年。一〇〇四）三月七日条には、因幡国に于陵島の人、十一人がやって来たところなので、その頃の出来事と思われます。藤原公任には「うるま」の人と言葉が通じなかったという歌も残っています。

「秋の風の涙」と言えば、当時の人はすぐに、晋の張翰が秋風の吹きはじめ頃、故郷の鱸魚の膾などを思い出し、官を辞して故郷に帰った故事を思い浮かべます。また、「暮雨の魂」は、夕暮れ時の雨音を聞いていると、望郷の思いのあまり、魂が故郷に飛んでゆきそうであるということを言い、白居易の『白氏文集』に類似の表現があります。そのせいでしょうか、この詩句そのものが、中世の歌人の間では白居易の作品として愛誦されていたというエピソード

をもっています。白居易の作品と間違われるほどの佳句であるという評価を示すものと思います。また、この詩句は後世への影響も強く、藤原定家の『拾遺愚草』（巻下・無常）に収める

秋のわきせし日、五条へまかりてかへるとて

たまゆらの露も涙もとどまらずなき人こふる宿の秋風
『新古今和歌集』巻八・哀傷歌・七八八

という、父俊成との贈答の一首や、『月詣和歌集』（巻三・羈旅部・二七三）の

つくしへまかりけるに、みちよりみやこへいひつかはしける
登蓮法師

ふるさとをこふる涙のなかりせばなにをか旅のみにかけまし

も、当句を踏まえている可能性があります。

六

人在^レ威而不^レ在^レ衆 我王也万夫之防 器在^レ利而不^レ在^レ大 斯劍也三尺之長 漢高帝斬^二白蛇^一賦 白

『新撰朗詠集』巻下・帝王付女帝 法皇 行幸・六一四

人は威^{ひど}に在^あつて衆^{しう}に在^あらず 我が王^わは万夫^{ばんふ}の防^{はう}なり

器^{うつはもの}は利^りに在^あつて大^{だい}に在^あらず 斯^この劍^{けん}は三尺^{さんせき}の長^{ちやう}なり 漢^{かん}の高帝^{かうてい}白蛇^{はくさ}を斬^きる賦^ふ 白

人間の価値はその人の威儀・威厳にあるのであって、たくさん部下を持っていることにあるのではない。わが王、漢の高祖は一人の丈夫たちにも匹敵する偉大な力をそなえている。武器の価値はその鋭利さにあって、大きいことにあるのではない。この漢の高祖が持っていた名剣はわずか三尺の長さしかなかった。

という意味の句で、前漢の高祖（劉邦）が自ら白蛇を斬った故事により、漢朝創業の徳を讃えたものですが、現在でも十分に人生訓として通用するのではないでしょうか。「威」というのは、『論語』「述而第七」に「子温にして厲し、威ありて猛からず。恭にして安し」（子温而厲、威而不猛、恭而安）などとあって、孔子から受ける印象をいうことばですが、「威ありて猛からず」とは、自然に備わった威厳・おごそかさはあるが、威張ったところや激しさに過ぎることはない、という意味です。遠くから望み見ていると畏れたくなるような威厳はあるが、そばに近づいてみると、人間的な温かさが感じられるということでしょう。『論語』「堯曰第二十」でも、君子が備えるべき「五美」の中の一つに、「威嚴があつて猛々しくないこと、威あつて猛からず」を挙げています。

漢の高祖の「三尺の劍」（約六十七・五cm 一尺は、二十二・五cm）で、短いことをいう）は、我が国の文学にも影響を与えていて、『平家物語』卷三「医師問答」や、『保元物語』『十訓抄』などにも見えます。さらに、『和漢朗詠集』（巻下・帝王・六五三）にも、

漢高三尺の劍、坐ながら諸侯を制す、張良一卷の書、立ちどころに師傳に登る（後漢書）

と採られていて、よく知られていた話だったことが分かります。（漢高三尺之劍、坐制諸侯、張良一卷之書、立登師傳（後漢書）

七

榮路遙而難期 春陽薄 寒木之頂 筆耕疲而未獲 秋風暮 虛苗之畦

九月尽北野廟 高積善

榮路遙かにして期し難し 春陽寒木の頂に薄る

『新撰朗詠集』巻下・述懷・七〇七

筆耕^{ひつかう}疲^{つか}れて未^{いま}だ獲^からず

秋^{あき}の風^{かぜ}虚^{きよ}苗^{なへう}の畦^{うね}に暮^くれぬ

九月^{くぐふじん}尽^{じん}、北^{きた}野^の廟^{べう} 高^{たか}積^{しき}善^{ぜん}

若い日は確実に過ぎて行き、社会的な出世もできず、学問も期待していたほどの成果が得られないことを嘆いた句です。

春の日ざしのような暖かい恵みが、寒々とした木立^{いんたけ}の頂^{いただき}のごときわが身に迫っていると、わたしにとつて栄達の道は遙か遠くて期待するのはむずかしいと思うことだ。また、実を結ぶことのない苗^{なへう}が畑^{うね}の畦^{うね}で秋風に吹かれて夕暮れを迎えてしまったようなもので、わたしは学問に努めるのにも疲れ果て、得るものは何もないさそうだ。

私たちも、時としてこのような絶望の淵に追いやられるような辛い思いをしたことはないでしょうか。自分では一生懸命努力しているつもりなのに、そのことを周りが評価してくれない嘆きです。そんな時、この句を読むと、ほつと救われる思いがするのではないでしょうか。ああ昔も、自分と同じ思いをした人がいるのだと。そしてまた、明日への活力が湧いてくるのではないかと思えます。寛弘元年（一〇〇四）九月尽の日、北野聖廟^{せいびやう}（北野天満宮）での作で、学問の神として尊崇されていた菅原道真に救いを求め、訴えているかのように思われます。

作者の高階積善は、平安中期、寛弘年間の宫廷漢詩人の漢詩文集『本朝麗藻』を編纂しています。そのことを知ると、努力は報われるのだと、生きる勇氣も湧いてくるように思われます。

八

心事結^し風功不^レ就 浮榮書^レ水字難^レ成 寄^レ野 良春道

『新撰朗詠集』卷下・述懷・七〇八

心事風に結んで功就らず
心^{しん}事^じ風^{かぜ}に結^{むす}んで功^{こう}就^ならず
浮榮水に書いて字成り難し
浮^ふ榮^い水^{みづ}に書^かいて字^じ成^なり難^{がた}し
野に寄す
野^やに寄^よす
良春道
良^{りやう}春^{しゆん}道^{だう}

この句も、思いを成就することのむずかしさ、また、栄華のはかなさを詠んだもので、前の句のすぐ後に載っています。出世しなくても、また学問が成就しなくても、そんなに嘆く必要はないと激励しているように感じます。

思いを実現させることは、風にものを結びつけるようなもので、なかなか成就しがたい。また、世の中の栄華は、水に字を書くようなもので、すぐにはかなく消えてしまう。

「心事」「浮榮」という白居易の詩によく出てくる言葉を使い、「野」、すなわち小野篁^{たかむら}を慰めています。小野篁は、作者の惟良春道^{これながのはるみち}とともに漢文学史上、大きな転換期である承和年間（八三四年～八四八年）の和漢兼才の詩人で、その才能を「絶世の天才」、「詩家の宗匠」などと讃えられました。そうした人でさえ、友人に慰められることが必要なくらい、失意に沈んでいたこともあったということを知ると、私たちはほっと救われる思いがします。

九

鳳掖君誇温樹露 龍門我泣浪華春 賀「黄門署」 順
鳳^{ほう}掖^{えき}君^{きみ}誇^{ほこ}温^{おん}樹^{じゆ}露^る 龍^{りゆう}門^{もん}我^{われ}泣^な浪^{らう}華^{くわ}春^{はる} 賀^が「黄^{くわう}門^{もん}署^{しよ}」 順
龍門には我泣く浪華の春に 黄門署を賀す 順

『新撰朗詠集』巻下・慶賀・七二二

先に、源順が能登国守に赴任するに際し、饞別の宴の時に詠まれた菅原輔昭の作品をみましたが、その時にも述べ

たように、順は若い頃は官職に恵まれませんでした。出世できなかったのは、官吏登用試験に合格できなかったためであることが、この詩句から分かります。この句は、友人が対策という試験に及第して蔵人所に補任されたのを祝ったもので、作者の順はそれに対して、対策に落第して涙にくれているのです。

君は宮中で天子の暖かい恵みを受け、誇らしげだ。それにくらべてわたしは今年も対策に落第して、波の花の咲く春、涙にくれている。

友人と自分の姿を対照的に描くことで、自ずと友人に対する祝意が込められ、それが主題の句のようですが、読む私たちには順の失意の方が強く胸に迫ってきます。順は、この後も対策に及第できなかったようで、結局、文章博士にもなれず、卑官のままに一生を終えました。先に見た能登守への任官は、順が最晩年、獵官活動をしつづけた末の成果だったのです。「温樹の露」は、天子の暖かい恵みの意で、『蒙求』『孔光温樹』など、漢の孔光の故事に拠る言葉です。「龍門」は、「登龍門」の故事でよく知られているように、立身出世すること、栄達することを「龍門に登る」と言いますが、ここは龍門に登れずに、対策の試験に落第したのです。対策は、式部省で行われる省試という試験に合格した文章得業生（秀才）が、勉学に励んだ数年後、受ける試験のことで（方略試、また、秀才試という）、これに合格すれば、官界に入るか、また文章博士をさらにめざすことができるのですが、順はその試験になかなか合格できなかったようです。「我泣く」の「泣」は涙を流すことなので、声を立てずに人知れず涙を流して泣いていたのでしょう。すでに見た順の様々な文学的業績を考えると、この失意はあり得ないことのように思われたりしますが、それだけ重みをもって順の悲しみが読む私たちの胸を打ちます。

十

独対「寒窓」 恨「明月之易」過 孤臥「冷席」 悲「長夜之不」影 奉「清大臣」 野相公

『新撰朗詠集』卷下・恋・七三四

ひとり寒窓に對つて 明月の過ぎ易いことを恨む
ひとり冷席に臥して 長夜の影けざること悲しむ
清大臣に奉る 野相公

弘仁十三年（八二二）春、文章生となった小野篁（この時、二十一歳）が、右大臣に対して令聞高い十二番目の娘を妻に下さいと申し込んだ手紙の中に見える句です。

ひとり寂しく冬の窓に向かい、中秋の名月と一緒に賞でる人もいなくて、明月の時があつという間に過ぎて行つたことを恨めしく思う。また、ひとり冷たいむしろに臥して、冬の長い夜がなかなか明けないことを悲しく思うことだ。

ひとり悶々と悩み苦しみ、恋慕の情を寄せる辛さを詠んだものです。手紙の宛先の「清大臣」は誤りで、ここは藤原三守のことをいいますが、その娘の貞子は仁明天皇の女御となり、成康親王を生んだことが知られています。つまり、篁の切ない恋の思いは届かなかつたということになります。小野篁は、『百人一首』にも載る、

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

の歌で知られていますが、遣唐使のことを風刺して「西道謠」という漢詩を作り、時の権力者に敢然と立ち向かった人間像とは、ずいぶんギャップがあるように思います。若かりし頃の苦い青春の思い出ということでしょうか。

三つ前の高階積善の、若い日は確実に過ぎ去り社会的な出世もできず学問も期待していたほどの成果が得られないことを嘆いた句といい、惟良春道が小野篁を慰める句といい、順が友人の合格を祝う句といい、また、この小野篁の失恋の句といい、これらの句に詠まれるような状況は、現代の私たちにもわりあい身近なものとしてあるのではないでしょうか。それだけに、これらの詩句はどうてい他人事とは思われない親しみさえ感じられ、琴線に触れるものがあります。皆さんはいかがでしょう。

十一

梅が^{むめ}かを夜^よはの嵐^{あらし}の吹^ふきためてわが^{わが}閨^との戸^とをあくるまちけり
嘉言^{よしご}

『新撰朗詠集』巻上・春・梅（紅梅）・八七

梅の花は、その香りを昨夜の強い風が吹き集めておいて、わたしが寢室の戸を開けるのを待っていたのだった。だから、朝、戸を開けたら梅の花の香りが強かったのだろう。

『大江嘉言集』には見えない歌ですが、『相撲立詩歌合』の題に「梅近く香^か、窓に入る」とあるように、梅の木が家の近くにあり、花の香りが早朝、戸を開けるとともに窓から入ってきたという情景を詠んだものです。梅の花の香りを夜中の強い風が吹き集めておくという擬人法が効果的で、強烈な梅の花の芳香が印象に残ります。『千五百番歌合』百二十番・左・顕昭には、

梅が香を夜半の嵐の誘はずは閨の板間をいかで漏らまし

また、西行の『山家集』上・春・三九には、「いはりのまへなりける梅をみてよみける」の詞書で、

梅が香をたにふところにふきためていりこん人にしめよ春風

の歌があります。これら嗅覚を強く刺激する歌の淵源は、どうやら大江嘉言の歌にあるようで、藤原基俊の撰歌眼が
高く評価されます。

十二

なつの夜はまだ夜ぬながら曙ぬるを雲のいづこに月残覧 深養父

『新撰朗詠集』卷上・夏・夏夜・一四五

夏の夜は、まだ宵のうちだと思っている間に明けてしまったが、それではいつたい、雲のどこに月は沈まな
いで残っているのだろうか。

夏の夜は、他の季節と違って、暮れたかと思うとすぐに明ける短夜です。上句ではそのことを「まだよひながら曙
ぬるを」と、論理を無視して誇張して詠んでいます。下句は、こんなに早く夜が明けたのでは月は西の山にまでたど
りつけないだろうから、雲のどの辺りにまだ残っているのか、と想像をめぐらしています。出典の『古今和歌集』の
詞書によれば、月の美しい夜、宵から暁まで月をながめて明かしたときに詠んだとあります。つまり、短い夏の夜
を強調した上で、見飽きない月を愛惜する気持ちで詠んだ歌ということになります。

この歌は、『古今和歌集両度聞書』に「心はただ月に飽かぬよしなり」とあり、月を愛でる気持ちのいまだ色あせぬ
余情を主題とすると理解しているようです。しかし、『百人一首』の古注を見ると、たとえば『応永抄』に「是はた

夏の夜のとりあへず明けぬる事をかくよめる也」というように、夏の短い夜のことを詠んだ歌としています。あつけなく明けた夏の夜に対する感慨の歌と理解して、そこに月を愛でる気持ち、少なくとも表面には出てきていません。『新撰朗詠集』に当歌が採られたのも、「夏夜」項にあることから、『百人一首』古注の理解と同様と思われます。そして、当歌が高い評価を受けるようになるのは平安後期になってからで、その先鞭をつけたのが『新撰朗詠集』ということになります。新古今時代になると多くの本歌取りの歌が作られています、そのことを考え合わせると、藤原基俊の撰歌眼を高く評価していいのではないのでしょうか。

十三

晨明ありあけのつれなく見えし別わかれより 暁あかつき許きはうき物ものはなし 忠岑ただみね

『新撰朗詠集』巻下・暁・三九三

後朝きぬぎぬの別れを惜しんで帰る明け方の空に、そ知らぬ顔をして出ている有明け月が冷たく感じられてからは、暁ほどつらく悲しいものはない。

夜明け方、尽きない名残を惜しみながら帰る後朝きぬぎぬの別れの情緒を詠んだ歌です。ただし、出典の『古今和歌集』や『古今和歌六帖』では「来れども逢はず」の箇所収められているので、原作者壬生忠岑も含めて古今集時代の理解は、「逢はずして帰る恋」（不逢帰恋）、すなわち逢えないで帰る嘆きの歌として理解されていたと思われます。

一方、後朝の別れの歌と理解する説は、『古今和歌集』の注釈書の『顕註密勘』に見え、顕昭（大治五年（一一三〇）頃〜承元三年（一二〇九）頃）の解釈から始まるようです。また、この歌は藤原公任の『三十六人撰』にも載らず、

藤原基俊が『新撰朗詠集』に採って以降、『百人一首』にも採られるなど、この頃から高い評価を受け、たくさんのお書に引かれています。このことと顕昭の注の存在とを考え合わせると、基俊もまた、後朝の別れの歌と理解していたのではないかと思われ、これまた藤原基俊の撰歌眼が高く評価されると言えるでしょう。

十四

落積朽葉が下のみなし栗おちつもろくちば何かは人ひとに有と被知ありしらむ

『新撰朗詠集』卷下・隠倫・五一三

わたしは、落ち積もった朽ち葉の下にある、殻ばかりで中に実も入っていない栗と同じような身だ。だから、どうしてわたしがここにいと知られることがあるのか、いや知られなくてよい。

「みなし栗」は虚栗で、殻ばかりで中に実のない栗のことを言います。平安後期、源俊頼・藤原基俊の時代になって使われ出した歌語という指摘があります（『歌ことば歌枕大辞典』「虚栗」項、日下幸男執筆）。『千載和歌集』卷十八・雑歌下・雑体・短歌・一一六〇に

堀河院御時、百首歌たてまつりける時、述懐のうたによみてたてまつり侍りける 源俊頼朝臣

…これもさこそは みなしぐり ぐち葉がしたに うづもれめ…
という長歌が載ります。

さて、この歌は、朽ち葉の下「みなし栗」にわが身の不遇を重ね合わせて詠んだものです。栗は記紀・風土記にもその名が見え、万葉集にも詠まれるなど、人々の身近にあった植物ですが、平安期にはほとんど和歌から姿を消し

てしまいました。平安後期、源俊賴・藤原基俊の時代になって、また改めて「みなし栗」が使われ出し、さらに「みなし栗」に不遇の身を仮託して詠む歌で復活し、以後の歌にも受けつがれていきます。

一方、江戸期になると、松尾芭蕉や小林一茶などの俳人が好んで句中に取り込み、秋を代表する文学素材となっていることは周知の通りです。その意味で、『新撰朗詠集』に当歌が採られたということは、いわば、「みなし栗」の歌語が復活するきっかけを作ったということになるでしょう。

十五

怨^{うらみ}わびほさぬ袖^{そで}谷^や有物^{あるもの}を恋^{こひ}に朽^く南^{みな}名^なこそ惜^{をし}けれ

相摸^{さがみ}

『新撰朗詠集』巻下・恋・七三八

あの人のつれなさを恨み悲しみ、涙に濡れて乾く間もない袖さえ、まだ朽ちないでここにあるというのに、この恋のために浮き名が立って朽ちてしまうのであろうわが名がほんとうに惜しいことですよ。

「恨みの恋」を主題とした歌で、かなわぬ恋をしているわが身をいとおしみつつも、あきらめ切れない女心を詠んだものです。永承六年（一〇五二）五月五日『内裏根合』の題詠歌で、技巧が凝らされています。

「ほさぬ袖谷有物を」の「ほさぬ袖」は、涙を乾かすことができずに朽ちてしまう袖。「有物を」は、存在しているのに。すなわち、「涙でぬれて干す間もない袖さえ、まだ朽ちないで、まだここにこうして存在するというのに」という意味です。朽ちずして存在する袖と、朽ち果てて存在しなくなるわが名とを対比させています。知的な構成を主眼として、わが名が朽ちてしまうことの嘆きを詠んだ歌です。犬養廉・平野由紀子・いさら会著『後拾遺和歌集新釈下巻』

〔笠間書院、一九九七年（平成九）二月、二三三頁〕が指摘するように、後の康和二年（一一〇〇）四月二十八日、『源宰相中将家歌合』歴年恋・十九番・左（勝）・三七・隆源の「年をへて恋に朽ちぬるわが身こそ深山がくれのふし木なりけれ」という歌に対する判詞（衆議判。藤原基俊も参加）に、

…こひに身をくたすと申すことは、けふはじめて申す事にはあらず。ちかき歌合に、恋にくちなん名こそをしけれとよめば、とがにはあらず。…かのさがみが歌は、同じことなれども、此証歌にはあらずともや。かれは、ほさぬそでだにたえてくちざりけるに、わが身のこの事にたえずしてくちうせんことをなげくなり。

：

とあります。藤原基俊も参加した歌合で、基俊たちは相模の歌を、涙で乾く間もない袖さえも、全く朽ちることなく、ここにこうして存在しているのに、わが身がこの恋に堪えることができなくて、名が朽ち失せることを嘆くのだと理解していることが分かります。

一方、副助詞「谷（だに）」に注目して、「だに」は軽いほう（袖が朽ちること）をあげて、さらに重いほう（名が朽ちること）を類推させる語なので、「涙でぬれて、干しても乾く間もない袖さえも朽ちてしまうのに（または、「やがて朽ちてしまいうさなのに」）、ましてわが名（評判）も朽ちてしまうことが惜しい」という解釈もあつて、こちらが通説なのですが、藤原基俊はそのような通説の理解は退けて、『新撰朗詠集』に採っているように思われます。ここにも藤原基俊独自の撰歌眼を見てとることができましよう。

おわりに

『新撰朗詠集』は、上巻は春・夏・秋・冬という四季の分類で、それらをそれぞれ「立春」以下ほぼ六十七題目に、

下巻は雑部で、「風」以下ほぼ四十九題目に細分して和漢の詩歌を載せていて、自然と人事の様々な感慨を詠んだ作品が幅広く取りあげられています。また、季節折々の微妙な変化や美意識、漢詩と和歌の競演、対句の美しさなど編集方法にもたいへん工夫が凝らされています。皆さんも本書をお読みいただければ、きっと共感を覚える作品に出合えたり、詩歌の配列のすばらしさに感心することがあるはずです。

コンパクトでしかもバラエティーに富んだ内容は当時から好評で、『和漢朗詠集』とともに名句辞典として、また書道の手本として、多くの読者を得ていたようですが、『新撰朗詠集』編纂以後、特に江戸時代に至るまで、あらゆるジャンルに影響を与えつづけてきました。例えば朗詠といって、これらの佳句を管絃に合わせて朗唱することが盛んに行われ、それは貴族・僧侶から一般の人々にまで広がり、ついには遊女らが宴席でうたうようになり、後の平曲・歌謡・舞曲にまで大きな影響を与えています。また、しばしば仮名文学にも引用され、和漢混淆文こんこうぶんの成立をうながし、軍記物語や紀行文、謡曲などの文体の性格をも方向づけています。さらには、衣服の文様や調度品のデザインなどにも使われたりしています。

このように、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の世界は、平安王朝詩歌文学のエッセンスとして佳句・名歌が競演し、平安人の美意識をみごとにまでに映し出しています。

この綺羅、星のごとき詩歌の世界は、今後も末永く、輝きつづけるであろうと思います。ご静聴ありがとうございます。

(金沢学院大学教授)